

コンケン大学での居候生活 (5)

伊藤信孝

コンケン大学客員教授・工学部

本報では、チェンマイ大学からコンケン大学に移動して経験した、いくつかを紹介する。すなわち、日常生活に於ける衣食住に関する「理髪店」、「レストラン（屋台）」、「衣類修理」について記す。コンケン大学から3キロほど離れた所にアパートを構えることで大学側と合意し、住み始めた当初は、その場所が何処に位置し、周囲にどのような店があるのかさえわからなかった。考えてみればあたり前のことであるが、当初は最初に宿泊するアパートは一時的なもので1~2ヶ月すれば新しいアパートが完成するので、そちらに移転して欲しいと言う話であったから、あくまでも最初のアパートは一時的なものと考えて居た。しかし1ヶ月が過ぎ2ヶ月が過ぎようとするとき、予定していた新築のアパート建設の工事が遅れ、移転が難しくなった。そこで出てきたのが妥協案で、「それではこのアパートに1年間契約で住むのはどうか」という話であった。自身も移転があまりにも短期間で、落ち着かない状況では仕事以外にいろいろと神経を払わねばならず、また現在のアパートに入居の際に頭金 (Deposit) を支払っているから、移転となるとまたしても頭金の支払いが生じる。頭金は自分が支払うのであるから、節約にも成る。アパートの契約は居住する本人とアパートのオーナーとの間で行われ、大学は関与しない。しかし毎月の住居費は大学が負担する契約になって居る。毎月5日に先月分の家賃を支払う事になっている。その時支払った額の領収書を大学に出し、大学がそれと同額の金額を、筆者の銀行口座に振り込むと言う、ややこしいシステムであった。流石に大学もこれではと考えると、後日学部長から話があり、大学は「アパートのオーナーから直接領収書を貰えないので、貴方にも迷惑を掛ける。そこで相談だが、これまで2ヶ月の実績を踏まえ、その額を考慮した分を毎月のサラリーに上乗せして支給するがそれで良いか」との合意が求められた。断る理由もないので即座に合意した。水道、電気の使用量により、支払い額が毎月いくらか変化するが、それをカバーするだけの余裕を含めた額が示され、その額で合意した。また交通費も「大学が支払うことで契約に含まれていた」が当初は様子見で、事務処理が遅れ筆者自身が一時的に立て替え払いをしておき、1ヶ月毎に領収書を提出する形であったが、当初より支給金額は決まっていたから、記録を取る必要も無く、また領収金額の総額を示す必要も無かったが、どの程度必要かと言うデータを取るためにタクシー会社から送付される領収書の金額を毎日2ヶ月間記録した。10月、11月分の交通費はそういうわけで筆者自身が一時的に支払ったが、これも支払い金額に拘わらず一定量の額が支給されるのであるから、記録も領収書も結果的には不要となった。結論から言えば事務処理手続きの遅れが全ての原因であった。毎日タクシー利用での大学通いでは歩くことは殆ど無い。その上、大学ではオフィスに入ると殆ど動き回ることはいないから運動不足になる。動かないから食べるものを

減らす、それでも最小限食べなければ生きてはいけない。段々と運動量が少なくなり、肥満になる。体重も一向に減らない。「糖尿病にならぬよう、またそれが進行しないよう食事療法を心がけよ、また運動せよ」と主治医には言われているが、このままでは一向に解決にならない。週末を利用して周囲を散策して見ると、多くの店が周囲にはあり、理髪店、レストランも彼方此方にある。アパート近くで初めて見つけたレストランで、夕食を食べるために入ったが、いささか価格が高かった。あとでスタッフにタイ語で書かれた領収書を見せると「チョット高いのでは・・・」と言われた。普通はその半額が相場であった。外国人と言うことで「ふっかけられた」ようである。タイではこのような事は珍しくはないが、遠い昔のことならともかく、わずかの金額でこのような対応を見せられると、やはりがっかりである。その時以来、そのレストランには2度と足を運んでいない。

筆者が住むアパートは本来ホテルであり、筆者のような長期滞在者も月間あるいは年間契約で受け入れているらしい。中にはコンケン大学の学生、職員も少なからず居るようである。もちろん彼らはバイクや車を持ち通勤、通学している。年も違う。そこでいくらか歩き回ってみると、なかなかどうして、多くの店があるではないか。約2ヶ月ほど髪を切っていなかったのも、手当たり次第に赤と青に白の開店表示灯（これは遠い昔には医者や病院の前にあった）を付けた理髪店を覗いて「髪を切って欲しいが可能か？」と聞いてみると、「此処は女性理髪のみだ」とか「閉店時間だからだめ！」と断られ、いささか腹立たしく、少々不機嫌な面持ちで入った4番目ほどの理髪店は、極めて感じが良く、手際よく調髪し、料金も極めて安価（ただし、洗髪はなし）であった。何はともかく親切で正直、誠実なのが気に入った。わずかながらチップをはずんで後にしたが、これからはこの店にくると決めている。その後、だいぶん落ち着いてからアパートの前で商売している屋台店を試してみることにした。うどんを注文することにし、自分が知る太麺のメニューを告げると、中に入れる肉は何にするかと聞いてくるので鶏が良いと答えると、数分で出来上がった。その時の味は凄く筆者の好みであって、以来2ヶ月ほど、殆ど毎夜通い付けている。価格も安価で、顔を見ると注文しなくてもそのメニューが出てくる程、顔見知りになった。最近やっと別のご飯のメニューに変えたが、心やすくなったこともあり、休日が続く閉店するときは「明日から何時までは店を閉めるから」と連絡してくれるようになった。またタイのお金の札を見間違えて出すと、普通なら知らぬ顔で取っておくのが当たり前だと想うのだが、その店の女将さんは正直に確認して、釣り銭を戻してきた。この正直、誠実さがまた気に入った。主人も人なつこく一生懸命に話しをしようとするところが良い感じを与える。この店が休日で、閉店の時に出かけたもう一つの店では若い夫婦が営業しており、姑も子供も一緒に居る。年老いた姑もサービス精神に溢れ、水を運んでくれる。ここでも、店に行くとメニューは決まりの一品で注文しなくても自動的に配膳されるほどになった。言葉が通じないので、最近ではスマホを使って、グーグルの翻訳ソフトを使ってコミュニケーションしている。年末、正月も店は開けているから来て下さいと言う。有り難い話である。小さな子供まで時には水を運んでくる。家族ぐるみのおもてなしで

ある。これもタイの人ならではの感じである。この2つの店を休日の閉店を勘案しつつ交互に訪れている。

次はタイ版100円ショップの話である。チェンマイでも馴染みになった店があるが、コンケンでも同じような物品を扱っている。殆どすべてが基本的に20パーツ（約70円ほど）である。もちろん高価なものも扱っている。しかし特にプラスチック製品は安価である。しかし大半は中国製であり、買うときの注意が必要である。すなわち袋に入っている製品、部品については面倒であるが袋から出して店の人の前で付属品などが全て揃っているかなどを確認する必要がある。また部品が入っていない場合は即座にその旨告げて返品、新品と交換の対応をする必要がある。展示品を目安に購入して家に戻って組み立てると部品が4個足りない。即座にとって返し、その旨を告げたが、新品が無く展示品で我慢という結果になった。この場合、展示品も新品も価格に差は無い。さらにおもしろいのはその製品の部品が不足で返品した品を同じ価格を付けて展示して居るではないか。店の者が商品に精通していないこともあって、このような商法はごく当たり前である。日本に来た中国人観光客が買い物で、展示品を前に従業員から説明を聞き、購入を決心した直後、日本の店員は奥に締まってある同種の品を包装して手渡そうとするが、観光客の多くは「何故だ、何故説明した品をくれないのか怪訝な顔をする」と言う。「説明をしたときの品を包装せずに、別の同じ品番の品物を包装するのか、ひょっとすると必要部品が入っていないのでは」との疑念が一般に有るのではと想われる。ここの若い店員の一人が日本語が少しできるので顔なじみになった。分からぬ時は気楽に聞けるようになった。

次は衣類の修理である。コンケンに移動するときは無造作に袋や鞆に入れて運んできた衣類に、よく見ると破損した部分や既に破れ掛けて居る部分を見つけ、通りかかった衣類修理店に飛び込んで修理が可能かどうか尋ねて見た。可能だが何時までかと言われると少々時間がかかると言うので、値段を聞き、お任せすると言って帰宅した。翌日もう2着ほど修理を要する衣類が出てきた。早速持参して尋ねると2日ほど前の修理依頼したズボンが既に修理されてた。そして、この日に持ち込んだ分はその目の前で、ものの10分ほどで修理完了となった。当初は時間的にかかる予定であったが、その手際よさが気に入った。形式的なチップでは無く、本当に有り難いと言う感謝を込めた気持ちでチップを手渡した。これほど気持ちの良いものはない。夫婦が店内から外の道路を見るようにミシンを並べて仕事をする様は仲の良い夫婦そのものであった。それ以来その店の前を通るときに見かける彼らには必ず手を振り、彼らも会釈で応えてくれるようになった。有り難い話である。何ともすがすがしく気持ちが良い。

2019年の末に日本に一時帰国して、2020年正月にタイに戻ってからは、コロナ禍で自由に出歩く事は堅く禁止された。一時帰国の度に母校の大学病院で健康診断をすることにして居たが、コロナ禍でそれも叶わない。かといって診断に基づく処方箋がなければ適切な投薬もできない、と言う訳で、1年に2回ほどの健康診断を現地でしてはとの助言を受けた。かれこれ10ヶ月も健康診断をして居ないので、事前に診断項目を教えてもらい、臨んだ。

予想通り、もっと運動せよとの指示が帰ってきた。ではどうするかと考えた挙げく、上記した店が建ち並ぶ道路を大学と想われる方向に歩いてみると、タクシーで通るたびに見かけた建物が目に飛び込んできた。さらに進むとどこかで見たことのある建物のようなのである。確認の為にさらに歩を進めると、自分のオフィスがある建物によく似ている。近づくにつれその確認が現実味を帯びてきた。建物のまえに書かれたタイ語の名称も一致している。思い切って中に入ってエレベータに乗ると、まさしく自分のオフィスが目の前に入って来た。「なんだ、こんなに近くであったのか」とあらためて驚きであった。時間的にどの程度であったかを再確認するために、帰路は試みに計時して見た。およそ40分であった。と言う事はアパートと大学のオフィスは3キロほどの距離と言うことになる。このとき以降、毎日この距離を歩いている。交通費を貰っているので、いささか金欲しさに歩いていると想われたくないが、健康第一である。また金は別の使い方もある。有益に使えば問題はあまるまい。おかげで体重は3キロほど減り、歩いている、その軽快さを直接肌で感じるほどの違いである。土日の週末、休日でも別に用が無ければ歩いてオフィスに行くことにして居る。腹の出方もいづらか引込んだかの感じすらする今日である。足の運びが軽快になり、これまでの重いという感覚が消えて快調である。よくよく考えてみれば、タクシーは通れる道しか通らないことや、渋滞の道は避けて通るのが当たり前であるから、一直線に目的地に向かうことはない。見たことのある大学の建物を何度も目にするのは、ぐるぐると目的地までの余分な道を回りながら練り進むからだと言う事が分かった。歩いた道と比較するとその違いがかなり大きいことが分かった。歩くことが健康に良いことは承知して居るが、歩くことによってさらにその利点を見つけることもできた。すなわち、毎日歩くのであるから、何処にどの様な店があるかなど、多くの情報を手にすることができる。また立ち寄って必要な物を買うこともできる。これまではタクシー通いであったから、立ち寄る店すら知らずに通り過ぎていたが、今では直ぐにその店に出向くことができる、などがその利点である。交通費の節約になり、健康管理にも良く、おまけに上記の様な余分の利点を見つけ出すことができた。何もかも有り難いことであると最近では感じるようになった。健康は自分自身だけでは無く、雇用主であるコンケン大学にも心配を掛けずに、また安心して滞在を受け入れて貰える重要な条件の一つでもある。自分の事もさることながら、他人に迷惑を掛けることは筆者が最もしたくないことである。「公のために51%、私に49%をとの考え」を堅持している自分がかえって他人に迷惑を掛ける事になってはいけない。心すべきと自戒している。おかげで歩いて大学に通うようになってから顔の色つやが変わった。スマホで話し中の映像をカメラで見た家族が「より健康になったように見える」と言う。嬉しい限りである。それで無くては働けないし、仕事もできない。本当に有り難い事と感謝している。



図1 衣類修理業の店主



図2 夫婦揃ってミシンに向かい客の注文を受け期日までに仕上げる



図3 プラスティック棚の完成品を示すカタログ



図4 筆者が購入した緑色のプラスチック棚
ック棚下部の箱棚の4つの脚部がない
が返却後値札を付けて展示品として展示
してある。



図5 焼き飯食堂の女将と子供



図6 女将とこどもの間で動く主人
(中央、あちら向き)